

中央大学箱根駅伝を「強くする会」を強くする



新任の鈴木修会長

「あいさつが長くなりますよ」そう前置きして所信表明が始まった。「口だけの協力ではダメですよ。チームには浦田監督がいるだけで支援のコーチやスカウトがない。コーチを置くにしても先立つものがが必要です。理事会、教授会、卒業生、南甲倶楽部などが力を結集する」「箱根駅伝はいまや国民的行事。ここで1番をとれば中大の知名度がさらに高まり、イメージアップになる。入学志願者も増える。箱根を制した東洋大の塩川正十郎総長がそう言っていました。日本中が注目する箱根のチャンスを逃す手はない」

軽自動車、小型オートバイなどで世界に進出する経営者として経験に基づいた自負がある。鈴木会長によると、インドでは軽自動車の年間生産販売が約110万台となり、世界の自動車メーカー

鈴木 修新会長 抱負を語る

「中央大学箱根駅伝を強くする会」の総会などが11月21日夜、東京・上野の上野精養軒で行われた。駅伝選手らを招いた激励会で新会長に就任した自動車メーカー、スズキの鈴木修氏(82)が「駅伝を強くする会を強くします」と力強くあいさつした。



駅伝チームの選手たち、少し緊張していた

17社のトップに立つ。「トヨタは5～6番手。うちはパキスタンでも1番。なんでもいいから1番にならなくちゃいけない。余生は母校に恩返し。駅伝の選手育成・強化は浦田監督にお任せをして、私は駅伝を強くする会を強くします」

約15分間のあいさつが終わると約230人が集まった会場から割れんばかりの拍手が起きた。

スズキ陸上部(浜松AC)は今夏のロンドン五輪へ3選手を派遣した。村上幸

史(やり投げ)、右代(うしろ)啓祐(十種競技)、海老原有希(やり投げ)各選手。駅伝チームも強く、鈴木会長は陸上競技に理解がある。



女子マネージャー陣

浦田春生監督の話

「年間を通して、強くする会にはご支援をいただき感謝しております。10人のトップランナーをそろえる箱根は総合力の勝負です。中大上位10人のハーフマラソンの平均タイムは63分53秒4。1キロ3分2秒ペース。箱根で区間賞を1人が2人取り、優勝争いに絡めるような調子になってきています」

新庄浩太・長距離主将の話

「部員の代表という小さなことではなく、Cマークを付けた中大の代表選手として箱根に臨みます。レースまで一人ひとりが高い意識をもち、プレッシャーをプラスにできるよう頑張ります。皆さま方の応援はプラスになっています。ありがとうございます」

中大から 初の剣道日本一

「やっと中央大学に
天皇盃をもたらすことができました」

木和田 大起選手(大阪府警)は 平成13年卒副主将

剣道日本一を決める全日本選手権は11月3日、
東京・千代田区北の丸の日本武道館で行われ、
出場3度目の木和田大起選手・六段(34)＝中大一大阪府警＝が初優勝した。
観客席で応援していた中大剣道部・北原修監督は木和田選手が在学中の助監督。
日本一になるまでの逸話を話してくれた。



初優勝し、笑顔でインタビューに答える木和田選手
写真提供＝共同通信社

修業が生きた



内村良一選手・六段(警視庁)との
決勝戦。

木和田選手が竹刀を落した。竹刀
は場外へ。周囲をハラハラさせたが、直
後に相手の出鼻をくじく鋭いコテを決
めた。試合時間は10分間。勝負手のあ
と、残り2分をしのぎ切って初の栄冠を
つかんだ。

北原氏は学生やOBら約20人と観戦
していた。今大会に出場した中大出身
者は過去最多の8人。一緒に練習した
6歳下の後輩が決勝へ進出。応援にも
一段と力が入った。

「勝負を決めたコテは無心のなかで
生まれました。狙って打った技ではない
でしょう。平常心の賜物です。邪心がな
いから竹刀を落しても動揺しない。どう
いう状況になっても冷静でいられる。こ
れまでの修業が生きた剣道でした」

全日本選手権
終了後、1時間ほ
ど経ったころ、北原
氏の携帯電話が
鳴った。

「先輩、ありが
とうございました。北原修監督
やっと中央大学に天皇盃をもたらすこ
とができました。津村先生にもいい報
告ができます」

木和田選手からだった。インタビュー、
写真撮影…。慌ただしい試合後の合間
を縫って、先輩ら関係者にお礼のあい
さつをする。

「マジメですね。大勢の人に電話した
でしょう。私もうれしかった」

津村先生とは元中大監督でことし4月
23日に死去した恩師だ(享年72)。生前
「中大OBが優勝しないのはおかしい」
とよく言っていたという。実力は津村元
監督の折り紙つき。北原氏によると、木
和田選手は「やや遅咲き」の剣士だ。



遅咲き剣士



「中大時代は運動神経が抜群で、お
そらく何をやっても一流になったと思っ
ます。部では細かいところまでよく気が
つき、後輩たちの意見を聞いてチームづ
くり結びつけた。技術、精神力、チー
ムワークと3要素がそろっていました。部
の練習以外にも自分の足りないところ
を自主練習で補う。練習は誰もがしま
す。プラスアルファがあるかないか。ポイン
トはここです。公務員試験(大阪府警)
に備えてよく勉強もしていました」

中大時代からの鍛錬、苦労を知って
いるだけに北原氏は「優勝した瞬間は
涙が出て止まらなかった」という。

中大初の剣道日本一を称える祝勝会
(主催・OB会剣友会)が来年3月10日
(日)に東京・市ヶ谷のアルカディア市ヶ
谷で開かれる。うれし涙で会場が濡れ
るかもしれない。



中大スポーツ 優勝ラッシュ

この冬号でも「中大スポーツ 大活躍」をお届けします。
ボクシング、射撃、自動車、フェンシング、準硬式野球と相次いで
大学チャンピオンに輝きました。
♪ カ カ カ 中央 中央…と各所で
中央大学応援歌が高らかに歌われました。

撃ち合い、ボクシング部 決勝は中大同士



中大同士の決勝、手前が保田選手、後方が優勝した服部選手

全日本アマチュアボクシング選手権（11月22日～25日、日野市市民の森ふれあいホール）。ライトウェルター級の服部聖志選手（法学部4年）が中大勢による決勝で保田克也選手（商学部2年）を10-7で破って優勝した。服部選手は「高いレベルとスピード、パワー、テクニックを持つ」（中大スポーツ2012＝学員体育会発行）

射る 射撃部女子 清水選手が連覇達成

全日本学生、全日本女子学生ライフル射撃選手権（10月11日～14日、埼玉県長瀨総合射撃場）。日本代表女子チームに参加している中大の清水綾乃選手（商学部4年）が「50mライフル3×20女子競技」で昨年に続いて連覇した。50m先のターゲットに3姿勢（立射、膝射、伏射）で各20射する競技。清水さんは「射撃は80%がメンタルによるスポーツだと思います。学生最後の大会だと思うとどうしても勝ちたかった」

と振り返った。ライフルの重さは約7kg。これを自在に扱う練習を1日約5時間続けてきた。「練習していないと不安になります」。努力は報われた。

女子団体は総合優勝し、5年ぶりの栄誉に浴した。団体メンバーには清水綾乃、進藤美樹（商学部3年）、小泉茉優（同2年）各選手らが名を連ねた。2位は明大、3位が日大だった。

走る 自動車部 史上初の3連覇



全日本学生自動車運転競技選手権(11月18日、日通自動車学校杉並校)で中大が団体優勝。

競技は小型乗用の部A・B、小型貨物の部A・Bの計4部門に各1人が出場する各大学4人の構成。個人記録の合計によって順位が決まる。中大チームは乗用Aで森春陽選手(経済学部4年)が1位、貨物A、同Bで光本圭佑選手(法学部4年)、大小原俊選手(同3年)がそろって2位。乗用Bの安津畑翔平選手(経済学部4年)が3位に付け、レベルの高さを見せつけた。

女子の部では、乗用で細野日花里選手(法学部4年)が2位に入った。

今シーズンは既に優勝を決定した全日本学生ダートトライアル選手権(8月5日)、全日本学生ジムカーナ選手権(8月26日)とともに全日本学生選手権3冠を達成し、年間総合杯での優勝が決まった。

主要3大会すべての優勝は全日本学生自動車連盟が表彰制度を始めた1966年以来初の快挙。

斬る フェンシング部 男子サーブル団体で優勝

全日本大学対抗選手権大会(11月9日~11日、京都・大山崎町体育館)。男子団体サーブル決勝は中大が強豪法大に45-44で競り勝った。優勝メンバーは野里崇有(文学部4年)、前田修吾(経済学部3年)、小谷太洋(同2年)、中島哲雄(商学部2年)各選手だった。

サーブルは「突き」のほか「斬る(カット)」が加わるダイナミックな種目。有効面は上半身だけ。フルーレとエペは「突き」だけで争われる。

他種目の結果はフルーレ団体、エペ団体とも3位だった。

○学生個人では前田選手が優勝

対抗選手権に先立つ全日本学生個人選手権(11月7日~9日、会場同上)では、中大の前田修吾選手(経済学部3年)が朝日大4年の吉岡亜紀選手を15-12で下して優勝、対抗選手権に弾みをつけた。



勝つ 準硬式野球部 東都秋季リーグ制覇

東都大学準硬式野球秋季大会リーグ戦(9月1日~10月28日、八王子市民球場ほか)中大は勝ち点を全4校から奪う完全優勝、6シーズン連続の通算55度目の制覇。同リーグは東海大が不祥事で参加できず5大学で行われた。笠継康成投手(商学部3年)が5勝を挙げて、最多勝のタイトルを獲得。最優秀投手にも選ばれた。全9試合中6試合に登板。うち5試合に先発し、計37回3分の2を失点3という安定感

のよさを示した。

社会人が参加する関東王座(11月10日、明治安田生命八王子グラウンド)決勝で中大は法大に3-0で勝ち、この大会に3連覇。全3試合の得点は19、失点5という強さだった。

準硬式野球部は今シーズン、東都春季リーグ、全日本大学選手権、関東地区・社会人王座決定戦と主要4大会すべてに優勝を遂げた。

中央大学国際連携推進機構設立記念 日本IBM創立75周年記念講演会

「ITと創る賢い地球の未来」

11月17日、後樂園キャンパスにて、中央大学国際連携推進機構の設立と日本IBM創立75周年を記念する講演会が実施された。集まったのは中大教職員や学部生、大学院生をはじめ、他大学の学生や一般参加者ら総勢130人。会場は用意されていた席数以上の人数で通路も塞がるという大盛況ぶりだった。



武田浩一氏

渡辺日出雄氏

坂上好功氏

ジョン・ロビンソン氏

世界最前線のビジネスマン

開会に先立ち、加藤俊一副学長より「大学の最大の仕事は教育であり人材育成。日本IBMには、段階的コンピテンシー育成プログラムや、男女共同参画・理工系女性を応援するWISEプログラムなどで、大きくご協力いただいている。今回選んだ講師の先生方は、研究開発、ビジネスの最前線で世界を飛び回っている人ばかり。情報発信型のコンセプトマーケティングカンパニーであるIBMの話のみならず、広い世界から直接話が聴ける貴重な経験になるので、皆さんには多くを学びとってもらいたい」との挨拶があり、3部構成の講演会はスタートした。

負けないよ

第1部では、「世界一のクイズ王から医学王へ——質問応答技術とITの未来——」と題して、IBM東京基礎研究所技術理事であり、情報学博士の武田浩一氏が、アメリカのクイズ番組「Jeopardy!」に登場し勝利したIBMの質問応答システムWatsonと、Watsonの医療診断への応用について紹介した。

続いて第2部では、「ITが支える回復力のある街づくり——スマーター・シティ&レジリエント・シティ——」と題して、同じくIBM東京基礎研究所所属の工学博士、渡辺日出雄氏が講演。昨年の東日本大震災後、特に注目されている、緊急時の状態からいち早く通常状態へ回復できる能力(レジリエンス)について、IBMが取り組む緊急時と通常時の両方に対応したスマートな都市を実現するためのIT技術(気象予測、交通シミュレーションなど)を紹介した。

以上1・2部では、情報系に限らず、都市環境、経営システム、電気電子、化学、生命科学を学んでいる学生にも関連する話題をIBMの当該プロジェクトリーダー級の研究者が直接わかりやすく講演した。

3部では、前半とは少し内容を異にして、「グローバル社会、グローバル企業における人材、リーダーシップ」について、マネジメントや人材育成の立場から、システム・テクノロジー開発製造担当執行役員である坂上好功氏が講演し、未来のグローバル社会を担う参加学生に、「“負けない”よう主張することが大事。迫力で頑張ってもらいたい」と締めくくった。

最後に、同社マーケティング&コミュニ

ケーション担当で執行役員のジョン・ロビンソン氏の閉会の挨拶があり、「日本は世界でも有力な国。世界市場で競争力が日本ほどある国はほとんどない。君たちは上昇世代であり、若く、利口で賢い未来。これまで日本は世界で差別化を図ってきたが、これからは君たちが日本人として世界に、国際的に貢献していくことを願っている」と、技術大国である日本の未来を担う学生にエールが送られて講演会は終了。その後、IBMの講師・社員を交え、本学学生を対象とした情報交換会(懇談の部)が、7つのチームに分かれて実施された。

参加した学生たちは、飲み物を手に、リラックスした雰囲気の中で、グローバル・IT企業、ダイバーシティとは何か、キャリアデザインについて、講演者やIBMに勤務している中大OB・OGとの懇談など各テーマに分かれて交流を深め、この日のすべてのイベントは終了した。



学生を交えての情報交換会

働きがいのある 人間らしい仕事をするために

～国際労働機関 カレン・カーチス氏講演会～



カレン・カーチス氏の講演会

国際労働機関(ILO、本部・ジュネーブ)国際労働基準局次長カレン・カーチス氏を招いて「国際労働基準分野での最近の成功例と課題」と題する講演会が行われた。今回の講演は、中央大学法学部で毎年夏休みにILOにインターンする授業があり、ILOと本学との間に友好関係があることから実現した。約1時間半の講演は英日同時通訳で行われ、質疑応答では、学生から英語での質問も多く見られた。グローバル人材の育成の一環として行われた講演は、まさにその趣旨に合致するものとなった。(10月26日、多摩キャンパス8302教室、国際連携推進機構設立記念、第2回中央大学特別講演会)

ミャンマー、20年の監視

カーチス氏はミャンマーの事例、海事労働条約、フィリピンの事例、家事労働者、児童労働撤廃国際計画(IPEC)の事例を紹介した。

最初はミャンマーの事例だ。ミャンマーでは強制労働が行われている上、結社の自由が認められていない。結社の自由があれば強制労働を強いる使用者に対して集団で声を上げることができるため、この2つは本質的に関連している。

ILOはミャンマーをキーエリアとして位置付け、20年間にわたる辛抱強い監視と説得的対話をし、今なお強制労働撤廃と結社の自由促進を目指し活動している。

具体的な活動として、①ミャンマーの強制労働に関する苦情が寄せられる連絡事務所を開設②団結権と紛争解決に向けた法的枠組み構築を助言③労働者団体の設立④亡命していた労働者組合指導者を再入国させる⑤技術協力活動やILOセミナー⑥海外からの

投資によるミャンマーのディーセントワーク(働きがいある人間らしい仕事)への影響をテーマにしたレポートの準備などを紹介した。

減少した児童労働者

次は家事労働者についてだ。家事労働者は、書面契約がなくても家が職場となり、女性や移民、子どもといった弱い立場の人が過酷な家事労働を強いられている。ILOでは政府、労働者団体、雇用者団体に加え当事者団体も加えた対話(三者プラス)により家事労働者の人権保障を図っている。

児童労働者については2006年の2億2200万人から2010年の2億1500万人へと継続して減少傾向にある。5歳から14歳までは10%減少、少女の児童労働者数も15%減少している一方で、国によっては法定年齢に達している15歳から17歳の児童労働者は20%の増加。地域別で見ると、アジア太平洋、中南米では減少している一方で、サハラ以南のアフリカでは増加しているのが現

状である。

ILOは、さまざまなトレーニングを実施するほか、「南南協力」として情報、経験、意見の交換をしてきた。また、親の所得創出と雇用機会提供、児童労働に頼らないように資材や道具を支援、信用融資を得る機会の拡大といった特定の介入活動もしている。

【講演を聴いて】

ILOの活動がはつきりと認識できた。国家による労働者の人権保護がなされなくとも、企業は世界に進出し、過酷ともいえる労働を展開している。そんな現状の中で国境を越えて「労働者の保護のために」活動しているのがILOであると感じた。また、私たちが労働問題を考えるとき、雇用者と労働者の関係に注目しがちだが、そこには国家や地方自治体による基準や家事労働者の場合のように当事者(顧客)もが深く関わっているのだと感じた。

(学生記者 佐武祥子=法学部3年)